

日の夕ぐれにさへなりぬればと讀みたる人は、その花のふかみ草をしらぬ類なるべし。まことに紅白相まじへて咲き出づるさま、近來の人舉りて樂とせざることなしといへり。かくてその書に志せる牡丹四十三種なり、花毎に注釋あり、詳にして且盡くせり。卷尾に丹花四十三色也、獨遊軒無會と寫して花押あり、花合の會主なる歟。當時の流行想像るべし。寛永の巨菊、元祿の百椿、ちかくは寛政の橘、昨今の牽牛花と異なることあらかし、おもふに歐陽氏牡丹譜に載するもの九十餘種、こは錢思公が嘗輯録しつるものにこそあなれ。花品叙には、永叔が視めを経る所、人の稱するものを取りて、纔に二十餘種を出だせり、かゝれば我寶永の四十餘種、寔に寡きにあらず。寶永を眞盛にして、この花漸々に衰へたり、されば余○瀧解○瀧が總角のころまでは、駒込のあなた西が原てふ處に、茶器を鬻く牡丹屋とかいふもの、別莊に多く牡丹を植ゑしかば、俗に牡丹屋敷と呼び倣したり、そが家號を牡丹屋といひつるも、牡丹を愛るによりてなるべし、これもはや夢と覺めけん、今は彼處に、さるものありとしも聞えず、海内の名産輻湊して、よろづに乏しからぬ。大江戸なれども、今にして牡丹の生花を見んことは、三千歳に一たび花さくといふ優鉢羅花ハカよりもかたくなりぬ。

〔甲子夜話 九十八〕林蜂洲折簡往來ノ次デニ、北澤ノ牡丹屋敷ハ君知ルヤ否ト、予○松浦清知ラザルヲ以テ答フ、又云フ、ソノ花品數種版刻セシ者アリ、君見ルヤ否ト、予未ダ見ザルヲ以テ對フ、又我嚮ニ此編九十五卷ニ矚目掌果ト云ル、武州玉川邊ノ村里ヲ記ス者ヲ載セシ中ニ、甲州道新宿ノ奥ヲ高井戸ト云フ、近所ニ、北澤鈴木左内庭中牡丹多シト記セシガ、正シク是ナルベシト思ヒシニ、尋テ林子ヨリ彼ノ版刻ノ摺本ヲ贈ル、展觀レバ花王ノ富貴恰モ盡セリ、但榻紙幅大ニシテ縮寫シ難キヲ以テ、分贍シテソノ次第ヲ綴ル、
林又曰名花ノ品七百種ヲ踰ルハ珍茲ニ止ム、眞ニ泰平ノ餘化ト云ベシ、實ニ斯花始リ自來未曾